

ローマ書 13 章における二元倫理* Dual Ethics in Romans 13

岩佐 憲明

1. はじめに

ローマ書 13 章は、国家への人々の絶対服従を要求しているように見える¹。しかし、国家の政策が神の教えに反するとき、どうしたらいいのか？本稿は、まず、この問題に対するさまざまな回答を概観する。後に見るように、これらの回答は、国家が命じるのは道徳的に間違っていることに人々が従うのは道徳的に間違っている、と仮定している。しかしながら、国家の政策は道徳的に間違っているが、政策への人々の服従は道徳的に正しい場合があり得る。本稿は、国家の倫理基準と人々の倫理基準を区別する。そして、以下のことを指摘する。この二元倫理は、国家に従ったことに対する道徳的非難から良心的な人々を守る。二元倫理は、暴政を正当化するためにローマ書 13 章に訴えることを不可能にする。二元倫理はまた、学者のさまざまな回答と両立する。最後に、本稿は、新約聖書のいくつかの節が二元倫理を裏付けていることを示す。

2. ローマ書 13 章

ローマ書 13 章で、パウロは、国家への人々の服従を要求している。13 章は次の通りである。

¹ 人は皆、上に立つ権威に従うべきです。神に由来しない権威はなく、今ある権威はすべて神によって立てられたものだからです。² 従って、権威に逆らう者は、神の定めにく背くことになり、背く者は自分の身に裁きを招くでしょう。³ 実際、支配者は、善を行う者にはそうではないが、悪を行う者には恐ろしい存在です。あなたは権威者を恐れないことを願っている。それなら、善を行いなさい。そうすれば、権威者からほめられるでしょう。⁴ 権威者は、あなたに善を行わせるために、神に仕える者なのです。しかし、もし悪を行えば、恐れなければなりません。権威者はいたずらに剣を帯びているのではなく、神に仕える者として、悪を行う者に怒りをもって報いるのです。⁵ だから、怒りを逃れるためだけでなく、良心のためにも、これに従うべきです。⁶ あなたがたが貢を納めているのもそのためです。権威者は神に仕える者であり、そのことに励んでいるのです。⁷ すべての人々に対して自分の義務を

* 本稿は、次の拙稿を翻訳し、加筆・修正したものである。Noriaki Iwasa, "Dual Ethics in Romans 13," *Journal of Dharma*, Vol. 35, No. 2 (2010): pp. 159-169.

¹ 本稿では、ローマ書 13 章は、特に断らない限り、同書 13 章 1-7 節を指す。

果たしなさい。貢を納めるべき人には貢を納め、税を納めるべき人には税を納め、恐るべき人は恐れ、敬うべき人は敬いなさい(ロマ 13:1-7)²。

このように、13 章は、国家への人々の服従を要求している³。第 1 節と第 2 節で三回、パウロは、神が「上に立つ権威」を立てたと断言している。第 4 節と第 6 節で三回、パウロは「権威者」を「神に仕える者」と言っている。これらが、人々が権威に従うべき理由である。13 章は、国家への人々の絶対服従を要求しているように見える。

しかし、国家の政策が神の教えに反するとき、どうしたらいいのか？ クラウス・ニュルンベルガー(Klaus Nürnberger)は言う。「ローマ書 13 章は、これらの権威が神聖な目的を実現しない場合のそれらの地位に関して、何も指摘していない」。「ローマ書 13 章は、そのような事態において、信者に求められる姿勢についても何も言っていない」⁴。暴政を正当化するためにローマ書 13 章に訴える人がいる。ニール・エリオット(Neil Elliott)によると、ローマ書 13 章は、「ナチスの政策へのキリスト教徒の反対を抑圧し、実際に教会会議においてヒトラーへの熱狂を促進するのに役立った」。南アフリカでは、ローマ書 13 章は、「オランダ改革派教会(Dutch Reformed Church)の公式宣言の中で、アパルトヘイトを擁護するために引用され」た。ローマ書 13 章は「中米において暴政の重要な要素」であり、「そこでは福音派の牧師が『われわれは大統領に従わなければならないと聖書は言っている』と強く主張した」⁵。さらに、正戦論(just war theory)は、その根拠として 13 章に訴える。例えば、キリスト教徒の正戦論者であるジーン・ベスキー・エルシュテイン(Jean Bethke Elshtain)は、ローマ書 13 章を「最も有名な——そして、キリスト教徒の平和主義者にとって、ほとんど悪評に値する——一節」とみなしている⁶。正戦論が道徳的に正しいか間違っているかは別として、われわれは、ローマ書 13 章の政治的影響を見ることができる。13 章は、国家のいかなる政策も道徳的に正当化するのか？ もしそうなら、例えば、先ほど挙げた国家の非道な政策だけでなく、スターリン政権下のロシアやボル・ボト政権下のカンボジアの大虐殺を含む非道な政策も、道徳的に正当化される。これは問題があるように見える。

国家の政策が神の教えに反するときを生じる問題に対して、学者はさまざまな回答をしてきた。次節で、これらの回答を見てみよう。

² 聖書の邦訳は、新共同訳(日本聖書協会)を用いた。()内の書名略語は、同訳による。

³ 聖書には、類似の節がある。「指導者たちの言うことを聞き入れ、服従しなさい。この人たちは、神に申し述べる者として、あなたがたの魂のために心を配っています。彼らを嘆かせず、喜んでそうするようにさせなさい。そうでないと、あなたがたに益となりません」(ヘブ 13:17)。「主のために、すべて人間の立てた制度に従いなさい。それが、統治者としての皇帝であろうと、あるいは、悪を行う者を処罰し、善を行う者をほめるために、皇帝が派遣した総督であろうと、服従しなさい」(一ペト 2:13-14)。

⁴ Klaus Nürnberger, "Justice and Force (A Biblical Reflection on Romans 13)," in *Conflict and the Quest for Justice*, ed. Klaus Nürnberger, John Tooke, and William Domeris (Pietermaritzburg: Encounter, 1989), p. 112.

⁵ Neil Elliott, *Liberating Paul: The Justice of God and the Politics of the Apostle* (Maryknoll, NY: Orbis Books, 1994), pp. 13-14.

⁶ Jean Bethke Elshtain, *Just War against Terror: The Burden of American Power in a Violent World* (New York: Basic Books, 2003), p. 51.

3. 当該問題に対するさまざまな回答

ローマ書 13 章のさまざまな解釈を概観し、B.C.ラテガン(B. C. Lategan)は、国家の政策が神の教えに反するときには生じる問題に対して、六つの回答を見いだしている。第一は、「テキスト相互関連の処置(intertextual move)」⁷。これは、ローマ書 13 章を、新約聖書や聖書の他の部分を含む、より広い文脈の中に置く⁷。例えば、ローマ書 12 章と同書 13 章 8-14 節は、すべての人への愛を説いているが、13 章のための文脈を提供している。ヨハネ黙示録 13 章は、国家が凶暴になり得ることを示している。ダニエル書 7 章は、ローマを「第四の獣で、ものすごく、恐ろしく、非常に強」いと表現している。それは「巨大な鉄の歯を持ち、食らい、かみ砕き、残りを足で踏みにじった」(ダニ 7:7)。マタイ福音書 20 章 24-28 節、マルコ福音書 10 章 41-45 節、ルカ福音書 22 章 24-27 節は、イエスが、支配者が権力を行使する方法を批判したことを示している。マルコ福音書 15 章 1-5 節、ルカ福音書 23 章 8-9 節、ヨハネ福音書 19 章 8-11 節は、イエス自身、権威に常に従ったわけではないことを示している。ペトロと他の使徒は言う。「人間に従うよりも、神に従わなくてはなりません」(使 5:29; cf. 使 4:18-19)。ヨハネ黙示録は、忠実な信者に、反対の政治的圧力にさらされても、神の命令を守ることがを要求している。シャドラク、メシャク、アベド・ネゴは、ネブカドネツアル王の命令に反し、王が建てた金の像を拝むことを拒否した。なぜなら、彼らは、王の命令が自分たちの神の掟と矛盾すると考えたからである(ダニ 3:13-18)。パウロの次の言葉は、権威への卑屈な服従をほとんど示していない。「高官たちは、ローマ帝国の市民権を持つわたしたちを、裁判にもかけずに公衆の面前で鞭打ってから投獄したのに、今ひそかに釈放しようとするのか。いや、それはいけない。高官たちが自分でここへ来て、わたしたちを連れ出すべきだ」(使 16:37)。テキスト相互関連の処置は、これらの節が一見絶対的な服従要求を覆す、と考える。

第二は、「評価的処置(evaluative move)」⁸。これは「善い政府と悪い政府を区別する基準」を導入する。ローマ書 13 章 3 節は言っている。「支配者は、善を行う者にはそうではないが、悪を行う者には恐ろしい存在です」。だから、「善を行う者」に恐怖を与える支配者は、善い支配者ではない。ローマ書 13 章 4 節は、支配者は「あなたに善を行わせるために、神に仕える者」である、と言っている。したがって、神に仕える者でない支配者やあなたに善を行わせない支配者は、服従に値しない。また、ローマ書 13 章 5 節の「良心」という言葉は、「国家への批判と抵抗の可能性を内包している」。別の基準は、「すべての権威は神によって定められており、ゆえに、神に対する責任がある」ということである。「この責任を果たさない権威は、権威自身への服従を要求することができない」⁸。さらに、ローマ書 13 章 7 節は言っている。「すべての人々に対して自分の義務を果たしなさい」。ジェームズ・モルダー(James Moulder)が指摘するように、「われわれは、政府に従い、かつ、すべての人々に対する義務を果たすことが、常にできるわけではない。もっと具体的に言うと、政府への服従が隣人に害を与えるよう要求する状況にわ

⁷ B. C. Lategan, "Reception: Theory and Practice in Reading Romans 13," in *Text and Interpretation: New Approaches in the Criticism of the New Testament*, ed. P. J. Hartin and J. H. Petzer (Leiden, the Netherlands: E. J. Brill, 1991), p. 166.

⁸ Ibid.

れわれがいることがあり得る」⁹。また、ローマ書 13 章 3 節は言っている。「善を行いなさい」。ローマ書 12 章 2 節は言っている。「あなたがたはこの世に倣ってはなりません。むしろ、心を新たにしておいて自分を変えていただき……なさい」。モルダーは、ローマ書 13 章 7 節、13 章 3 節、12 章 2 節の中のこれらの三つの命令が、一見絶対的な服従要求を覆す、と主張する¹⁰。

第三は、「書き入れの処置(interpolation move)」。これは、「13 章は、精神があまりにも非パウロ的なので、あるいは、パウロの思想の残りの部分とあまりにも矛盾しているので、それは後期に原文に挿入された異質なものの(Fremdkörper)でしかあり得ないだろう」と断言する¹¹。

第四は、「ローマ書 13 章の普遍的対象範囲を制限することによる相対化」。これは、13 章の対象範囲を「特定の状況（ローマのキリスト教共同体の状況）または特定の問題（政府の打倒を考えている革命家やこの世の権威を軽視する熱狂者）」に限定する¹²。例えば、マーカス・ボーグ(Marcus Borg)は、ローマ書 13 章においてパウロは、一般の政府について話をしているのではなく、彼の時代のローマ政府について話をしている、と論じる¹³。フランク・スタッグ(Frank Stagg)は主張する。「この世からのキリスト教徒の解放をパウロが強調したことは、『やりすぎ』になりやすかった。その結果、『霊的な』者は、この世をただ軽蔑し、この世に対するいかなる義務も拒否するだろう」¹⁴。スタッグによると、ローマ書 13 章は、このやりすぎを是正するためのパウロの試みである。同様に、モルダーは、「キリストへの信仰が、すべての通常の義務から、そして道徳律がわれわれに課す義務から、われわれを解放すると信じる」反律法主義者(antinomians)と戦うために、パウロはローマ書 13 章を書いた、と主張する¹⁵。

第五は、「異なる前提のもとでローマ書 13 章を読むこと」¹⁶。「ローマ書 13 章は、非民主的状況下で書かれ、非民主的状況に言及していると一般に認められているが、13 章は『民主的前提のもとで』読まれ得る」¹⁷。民主的前提は、例えば、主権が人々にあること、人々が支配者を選ぶこと、支配者は人々の監視にさらされること、支配者は人々に対する責任があること、支配者は人々による免職にさらされること、を含む。民主的前提のもとで 13 章を読むことは、「読み手がテキストに異なる問いを持ち込めるようにし、その現代的含意について異なる結論を引き出せるようにする」¹⁸。例えば、読み手は、国家のすべての政策を盲目的に受け入れる必要はない。読み手は、政策が自分の意思と一致しているかを調べることができる。読み手は、支配者に政策を説明するよう要求できる。もし読み手が政策に異議があるなら、彼らは支配者

⁹ James Moulder, "Romans 13 and Conscientious Disobedience," *Journal of Theology for Southern Africa*, No. 21 (1977): p. 21.

¹⁰ Ibid., pp. 20–22.

¹¹ Lategan, "Reception," p. 166. 書き入れに関する主張については、例えば、以下を参照。Alex Pallis, *To the Romans: A Commentary* (Liverpool: Liverpool Booksellers', 1920), p. 141; James Kallas, "Romans XIII. 1–7: An Interpolation," *New Testament Studies*, Vol. 11, No. 4 (1965); J. C. O'Neill, *Paul's Letter to the Romans* (Harmondsworth, UK: Penguin Books, 1975), pp. 207–209.

¹² Lategan, "Reception," p. 166.

¹³ Marcus Borg, "A New Context for Romans XIII," *New Testament Studies*, Vol. 19, No. 2 (1973): p. 216.

¹⁴ Frank Stagg, "Rendering to Caesar What Belongs to Caesar: Christian Engagement with the World," *Journal of Church and State*, Vol. 18, No. 1 (1976): p. 112.

¹⁵ Moulder, "Romans 13 and Conscientious Disobedience," p. 17.

¹⁶ Lategan, "Reception," p. 166.

¹⁷ Ibid., p. 160.

¹⁸ Ibid., p. 166.

に政策を見直すように求めることができる。もし支配者が政策を変えないなら、読み手は、政策を撤回するか支配者を変えるために、投票によって自分の意思を表示できる。

第六は、「権威を再定義すること」¹⁹。ローマ書 13 章によると、「剣」は悪を罰する力を意味する。民主的解釈をさらに進めて、ニュルンベルガーは主張する。「剣は最終的に被支配者に属する。それは、被支配者の代わりに使うために、支配者に委任されているだけである」。ニュルンベルガーは言う。「もし支配者が罪を犯したのに、被支配者の監督を受けなければ、支配者は剣を使う権利を失い、この権利は本来の権威に帰る。その結果、現存する支配者ではなく、被支配者に、悪を——支配者によって犯された悪さえも——抑える力を行使する権利が与えられる」²⁰。ニュルンベルガーは、この解釈を非民主国家にも適用し、非道な支配者を免職し民主制を確立するために、その国家の人々が正当に支配者に反乱を起こせるようにしている。しかし、キリスト教の正戦論をもとに、ニュルンベルガーは、以下の条件下でのみ革命は正当だと主張する。(a)「正しい理由。……これは、支配エリートによる、全住民を犠牲にしての権力乱用だろう」。(b)「正しい目的。……革命は、それが正しい国家、したがって理想的には、完全な民主制の確立を目指す場合にのみ、正当である」。(c)「正しい手段。手段は目的を反映しなければならない」。(d)「釣り合い。もしなされる害が実現される善を上回る場合、闘争は正当でない」²¹。(e)「正当な権威。革命は、住民の正当な代表によって行われる場合にのみ、正当であり得る」。(f)「正当でない権威の打倒に関しても、正当な権威の確立に関しても、成功しなくてはならない」。(g)「革命闘争を含むいかなる戦いも、必然的に人命の損失、破壊、苦難、トラウマを抱えた社会的関係などを引き起こすので、それは最後の手段としてのみ正当であり得る」²²。これらの条件は、革命指導者を牽制し、本来の目的、すなわち民主制の確立からの逸脱を防ぐために必要である。

第二、第三、第四の回答に加えて、ダグラス・ムー(Douglas J. Moo)の調査と研究は、国家の政策が神の教えに反するときを生じる問題に対し、さらに三つの回答を見いだしている。第七は、「パウロは、政府がするかもしれない悪、あるいは、われわれにするように要求するかもしれない悪に対する認識が甘かった」。第八は、「パウロは、神の国が確立され権力を持つ前の短期間だけ、政府への服従を要求していた」²³。第九は、「パウロは政府への『服従(submission)』を要求しているのであり、厳格で全般的な服従(strict and universal obedience)を要求しているのではない。……キリスト教徒は、『より高い』権威に従って、政府が要求することを一定の場合拒否するときでさえ、(概して政府への従属を認めながら)特定の政府に『服従し(submit)』続けるかもしれない」²⁴。同様に、モルダーは反乱(rebellion)と良心的不服従(conscientious disobedience)を区別する。モルダーは、ローマ書 13 章は政府に対する人々の反乱を禁じているが、良心的不服従の余地を残している、と論じる²⁵。

¹⁹ Ibid.

²⁰ Nürnberger, "Justice and Force," p. 112.

²¹ Ibid., p. 113.

²² Ibid., p. 114.

²³ Douglas J. Moo, *The Epistle to the Romans* (Grand Rapids, MI: William B. Eerdmans, 1996), p. 807.

²⁴ Ibid., p. 809.

²⁵ Moulder, "Romans 13 and Conscientious Disobedience."

カール・バルト(Karl Barth)は、当該問題に対処するために、ローマ書 13 章の中の「神」という言葉を再解釈する。バルトは言う。『神』という決定的な言葉が残りのローマ書全体と対立してここで突然ある形而上学的一義性と所与性を持つことはできない²⁶。このようにして、バルトは、ローマ書 13 章の文字通りの解釈から抜け出す方法を提案する。

T.L.カーター(T. L. Carter)は、ローマ書 13 章が権威を是認しているという共通の理解を疑問視し、「ローマ帝国の抑圧的権威構造を暴露し転覆する秘密の方法として、パウロが皮肉という修辞法を用いている」ことを示唆する²⁷。パウロの時代の権威による権力乱用に言及し、カーターは、パウロの言葉と現実の間の大きな隔たりを指摘する。カーターは、ローマ書 13 章はパウロが「権威からの反動の恐れなしに批判」を表明する皮肉である、と論じる²⁸。

われわれは、国家の政策が神の教えに反するときに生じる問題に対するさまざまな回答を見てきた。しかし、これらの回答には反論がある。第二の回答について、ムーは述べる。「パウロは、明白に、われわれの服従を政府の行動の仕方次第で決めていない。3-4 節は単に記述的である」。しかし、なぜパウロはそうのように肯定的に政府を記述しているのか？ムーは言う。「その答えは、パウロはあるべき政府を記述している、ということかもしれない」²⁹。第四の回答は不可能かもしれない。ムーは言う。「1-2 節は避けるのが難しい。パウロはここで、わざわざ自分の要求の普遍的対象範囲を強調している。『すべての魂』は服従しなければならない。神の任命によらない『権威はない』」³⁰。さらに、国家が非道であるという事実から、神がその国家を承認していないということには必ずしもならない。デイヴィッド・ウィットフォード(David M. Whitford)は指摘する。「神が、悪行のことで人々を罰するために、時には暴君を任命する(例えば、バビロンは、イスラエル国民を捕らえることでイスラエルを罰するために選ばれた)」というテーマは、聖書のいたるところに繰り返し現れる」³¹。第七の回答はありそうもない。ジョン・ストット(John R. W. Stott)は言う。「パウロが理想国家のことを考えていたのは明らかである。パウロは、ローマの代官がイエスに死刑を宣告したことを知っていた。パウロはまた、自分がローマ市民であったにもかかわらずフィリピで裁判なしに鞭打たれたときのように、自分の経験から、ローマが不正ができることを知っていた(使 16:37)」³²。

私の目標は、どの解釈が正しいか間違っているかを判断することではなく、国家の政策が神の教えに反するときに生じる問題について考えるための新しい視点を提供することである。これまで見てきた回答は、国家が命じるのは道徳的に間違っていることに人々が従うのは道徳的に間違っている、と仮定している。これらの回答は、国家の倫理基準と人々の倫理基準を区別

²⁶ Karl Barth, *The Epistle to the Romans*, trans. Edwyn C. Hoskyns (Oxford: Oxford University Press, 1968), p. 484. [カール・バルト (小川圭治・岩波哲男訳)『ローマ書講解 下』平凡社、2001 年、428 頁。] 引用は邦訳による。

²⁷ T. L. Carter, "The Irony of Romans 13," *Novum Testamentum*, Vol. 46, No. 3 (2004): pp. 212-213.

²⁸ *Ibid.*, p. 226.

²⁹ Moo, *The Epistle to the Romans*, p. 809.

³⁰ *Ibid.*, p. 808.

³¹ David M. Whitford, "The Duty to Resist Tyranny: The Magdeburg Confession and the Reframing of Romans 13," in *Caritas et Reformatio: Essays on Church and Society in Honor of Carter Lindberg*, ed. David M. Whitford (St. Louis: Concordia Academic Press, 2002), p. 92.

³² John R. W. Stott, "Christian Responses to Good and Evil: A study of Romans 12:9-13:10," in *Perspectives on Peacemaking: Biblical Options in the Nuclear Age*, ed. John A. Bernbaum (Ventura, CA: Regal Books, 1984), p. 51.

していない。次節で、私はそれらを区別する。

4. 国家と人々の二元倫理

ローマ書 13 章によると、国家への人々の服従は道徳的に正しい。人々の良心が権威に従うことに反対しない限り、私は、この考えは有効だと考える。ローマ書 13 章の文字通りの解釈よりも良心を優先することに関して、私は、本稿第 3 章で見た回答のほとんどの同意する。良心は、人々が利用できる最も適切な基準であるように見える。人々は、得られる知識に基づき、国家の政策を良心的に判断すべきである。良心が反対するときは、人々は良心に従うべきである。

民主制において、国家の政策は、ある程度、人々の良心によって合法的にチェックされ得る。もし人々が国家の政策が神の教えに反すると判断すれば、人々は、政策を撤回するか支配者を変えるために、投票によって自分の意思を表示できる。この点において、民主国家は非民主国家とかなり異なる。後者においては、国家の政策が人々の良心によって合法的にチェックされ得ないからである。ニュルンベルガーは言う。「民主的前提のもとで、神は……支配者の無法を阻止するために、ある権威を支配者の上に置いてきた。この権威は住民の監視である」。「真の民主制は、平和な形の革命を制度化してきた。こうして、なされる害を最小限にしてきた。民主制度のもとでは、暴力は不要かつ不当である。なぜなら、粗忽者や権力乱用者は、流血なしに公職から追放され得るからである」³³。しかしながら、民主制においてさえ、投票によって非道な支配者を免職することが、常に可能なわけではない。例えば、代表民主制において、支配者を免職する合法的な方法がない限り、支配者は任期終了まで政権を維持できる。このように、民主制においてさえ、国家の政策と人々の良心との間に差異があり得る。

ローマ書 13 章は、国家の政策の正しさを保証しない。確かに、ローマ書 13 章 3 節は言っている。「支配者は、善を行う者にはそうではないが、悪を行う者には恐ろしい存在です」。そしてローマ書 13 章 4 節は、支配者は、「あなたに善を行わせるために、神に仕える者」であり、「悪を行う者に怒りをもって報いる」と言っている。しかし、これらの節は、ムーが示唆するように、「あるべき政府を記述して」³⁴いるかもしれないが、あるがままの政府を記述していない。神が権威を立てたという事実は、権威が神の教えに常に従うことを保証しない。国家の政策は神の教えに反し得るという点で、ストットは正しい。歴史上そのような例は多くある。例えば、スターリン政権下のロシアやポル・ポト政権下のカンボジアは大虐殺を行ったが、明らかに神の教えに背いている。

このように、神が権威を立てたという理由で、国家のすべての政策を道徳的に正当化することはできない。もしそのような正当化が可能ならば、先ほど挙げた国家の非道な政策は道徳的に正しくなる。なぜなら、神はそれらの権威も立てたからである。前に見たように、「神に由来しない権威はな」(ロマ 13:1)なのである。国家の政策が神の教えに反し得ることを示すのは容

³³ Nürnberger, "Justice and Force," p. 112.

³⁴ Moo, *The Epistle to the Romans*, p. 809.

易だが、ある権威が神によって立てられなかったことを証明するのは不可能に見える。

本稿第 3 章で見た回答も、ローマ書 13 章は国家の政策の正しさを保証しない、と考えている。これらの回答は、国家が命じるのは道徳的に間違っていることに人々が従うのは道徳的に間違っている、と仮定している。これらの回答は、国家の倫理基準と人々の倫理基準を区別していない。

しかしながら、国家の政策は道徳的に間違っているが、政策への人々の服従は道徳的に正しい場合があります。例えば、国家が邪悪な目的で何かを命令し、人々がその目的を知らずに良心的に命令に従う。これは起こり得る。人々は国家の真の意図を常に知っているわけではないから、あるいは、常に知ることができるわけではないからである。もし人々の倫理基準が国家の倫理基準と同一ならば、これらの人々が悪いことになる。特にローマ書 13 章が国家への人々の服従を要求していることを考えると、これは理不尽に見える。本稿第 3 章で見た回答がこれらの人々を守るかどうかは不明である。例えば、第一の回答である テキスト相互関連の処置は、国家が悪をなす可能性を示し、悪をなす国家に従うべきではないとする。しかし、国家が邪悪な目的で何かを命令し、人々がその目的を知らずに良心的に命令に従った場合、人々の道徳的責任はどうなるのかについて、この回答は論じていない。同じことが本稿第 3 章の他の回答にも言える。したがって、これらの回答が良心的な人々を守るかどうかは不明である。私は、国家の倫理基準と人々の倫理基準を区別する。この二元倫理は、国家に従ったことに対する道徳的非難から良心的な人々を守る。

本稿第 2 章で、暴政を正当化するためにローマ書 13 章に訴える人がいることを指摘した。二元倫理は、このような正当化を不可能にする。国家のいかなる政策も正当化するためにローマ書 13 章に訴える人は、国家の倫理基準と人々の倫理基準を一緒にしている。彼らは、人々にとって従うのが道徳的に正しいことを国家が命令するのは道徳的に正しい、と仮定している。二元倫理は、国家の政策の道徳性を、人々の政策に服従する義務から切り離す。このようにして、二元倫理は、暴政を正当化するためにローマ書 13 章に訴えることを不可能にする。本稿第 3 章で見たさまざまな回答もこのような正当化を不可能にするが、前述のように、これらの回答は国家の倫理基準と人々の倫理基準を区別していない。二元倫理は、これらを区別することで、そのような正当化を根本的に不可能にする。

二元倫理は、本稿第 3 章で見たさまざまな回答と両立する。ローマ書 13 章によると、国家への人々の服従は道徳的に正しい。人々の良心が反対しない限り、私は、この考えは有効だと考える。人々の良心が反対するときは、それらの回答のほとんどが、人々に不服従のさまざまな理論的根拠を与えることができる。

新約聖書のいくつかの節は、二元倫理を裏付けている。戦争はキリスト教の愛の教えと相容れないように見える。しかし、イエスは、次の一節において、百人隊長や兵士の職業を許しているか、大目に見ている。

さて、イエスがカファルナウムに入られると、一人の百人隊長が近づいて来て懇願し、「主よ、わたしの僕が中風で家に寝込んで、ひどく苦しんでいます」と言った。そこでイエスは、

「わたしが行って、いやしてあげよう」と言われた。すると、百人隊長は答えた。「主よ、わたしはあなたを自分の屋根の下にお迎えできるような者ではありません。ただ、ひと言おっしゃってください。そうすれば、わたしの僕はいやされます。わたしも権威の下にある者ですが、わたしの下には兵隊がおり、一人に『行け』と言えば行きますし、他の一人に『来い』と言えば来ます。また、部下に『これをしろ』と言えば、そのとおりにします。」イエスはこれを聞いて感心し、従っていた人々に言われた。「はっきり言うておく。イスラエルの中でさえ、わたしはこれほどの信仰を見たことがない。言うておくが、いつか、東や西から大勢の人が来て、天の国でアブラハム、イサク、ヤコブと共に宴会の席に着く。だが、御国の子らは、外の暗闇に追い出される。そこで泣きわめいて歯ざしりするだろう。」そして、百人隊長に言われた。「帰りなさい。あなたが信じたとおりになるように。」ちょうどそのとき、僕の病気はいやされた(マタ 8:5-13; cf. ルカ 7:1-10)。

イエスは、兵士を称賛し、百人隊長や兵士に軍人職を退くように言わなかった。同様に、ローマの兵士は、洗礼者ヨハネに、神が自分たちに何を期待しているのかを尋ねた。「兵士も、『このわたしたちはどうすればよいのですか』と尋ねた。ヨハネは、『だれからも金をゆすり取ったり、だまし取ったりするな。自分の給料で満足せよ』と言った」(ルカ 3:14)。ヨハネは、兵士に、地位を退くように、あるいは武器を捨てるように言わなかった。これらの節は、イエスやヨハネが百人隊長や兵士の職業を非難しなかったことを示している。しかし、これらの節は、国家の政策の正しさに言及していないし、国家の政策の正しさを保証してもない。イエスが兵士を称賛したという事実から、国家の政策が道徳的に正しいということにはならない。兵士は権威に従わなければならない立場にある。ローマ書 13 章は、権威への兵士の服従は道徳的に正しいことを示唆している。しかし、権威の正しさは別問題である。兵士は一般民衆よりも厳格に権威に従う義務があるので、二元倫理は前者において、より明らかである。しかし、二元倫理は後者においても存在する。

5. 結論

ローマ書 13 章は、国家への人々の絶対服従を要求しているように見える。国家の政策が神の教えに反するときには生じる問題に対して、学者はさまざまな回答をしてきた。これらの回答は、国家が命じるのは道徳的に間違っていることに人々が従うのは道徳的に間違っている、と仮定している。しかしながら、国家の政策は道徳的に間違っているが、政策への人々の服従は道徳的に正しい場合があり得る。本稿は、国家の倫理基準と人々の倫理基準を区別した。この二元倫理は、国家に従ったことに対する道徳的非難から良心的な人々を守る。二元倫理は、暴政を正当化するためにローマ書 13 章に訴えることを不可能にする。二元倫理はまた、学者のさまざまな回答と両立する。新約聖書のいくつかの節は、二元倫理を裏付けている。

文献表

邦訳を併記する文献以外、本稿中の引用は拙訳による。

- Barth, Karl. *The Epistle to the Romans*. Translated by Edwyn C. Hoskyns. Oxford: Oxford University Press, 1968. [カール・バルト (小川圭治・岩波哲男訳) 『ローマ書講解 上・下』平凡社、2001年。]
- Borg, Marcus. “A New Context for Romans XIII.” *New Testament Studies*, Vol. 19, No. 2 (1973): pp. 205–218.
- Carter, T. L. “The Irony of Romans 13.” *Novum Testamentum*, Vol. 46, No. 3 (2004): pp. 209–228.
- Elliott, Neil. *Liberating Paul: The Justice of God and the Politics of the Apostle*. Maryknoll, NY: Orbis Books, 1994.
- Elstain, Jean Bethke. *Just War against Terror: The Burden of American Power in a Violent World*. New York: Basic Books, 2003.
- Kallas, James. “Romans XIII. 1–7: An Interpolation.” *New Testament Studies*, Vol. 11, No. 4 (1965): pp. 365–374.
- Lategan, B. C. “Reception: Theory and Practice in Reading Romans 13.” In *Text and Interpretation: New Approaches in the Criticism of the New Testament*, edited by P. J. Hartin and J. H. Petzer, pp. 145–169. Leiden, the Netherlands: E. J. Brill, 1991.
- Moo, Douglas J. *The Epistle to the Romans*. Grand Rapids, MI: William B. Eerdmans, 1996.
- Moulder, James. “Romans 13 and Conscientious Disobedience.” *Journal of Theology for Southern Africa*, No. 21 (1977): pp. 13–23.
- Nürnberg, Klaus. “Justice and Force (A Biblical Reflection on Romans 13).” In *Conflict and the Quest for Justice*, edited by Klaus Nürnberg, John Tooke and William Domeris, pp. 107–116. Pietermaritzburg: Encounter, 1989.
- O’Neill, J. C. *Paul’s Letter to the Romans*. Harmondsworth, UK: Penguin Books, 1975.
- Pallis, Alex. *To the Romans: A Commentary*. Liverpool: Liverpool Booksellers’, 1920.
- Stagg, Frank. “Rendering to Caesar What Belongs to Caesar: Christian Engagement with the World.” *Journal of Church and State*, Vol. 18, No. 1 (1976): pp. 95–113.
- Stott, John R. W. “Christian Responses to Good and Evil: A study of Romans 12:9–13:10.” In *Perspectives on Peacemaking: Biblical Options in the Nuclear Age*, edited by John A. Bernbaum, pp. 43–56. Ventura, CA: Regal Books, 1984.
- Whitford, David M. “The Duty to Resist Tyranny: The Magdeburg Confession and the Reframing of Romans 13.” In *Caritas et Reformatio: Essays on Church and Society in Honor of Carter Lindberg*, edited by David M. Whitford, pp. 89–101. St. Louis: Concordia Academic Press, 2002.